

「ボール 1 ダース」

かつて東大和高校野球部で佐藤道輔先生は卒業していく部員たちに向けてこんな話をしていた。

「将来就職して最初にもらった給料で硬式ボールを 1 箱(1 ダース)を買ってグラウンドに持って来い。君達もこうして先輩が持ってきてくれたボールで練習してきたんだ。今度は君達が後輩達のために持ってくる番だ。こうやってチームはつながっていくんだ。先輩達が働いて持ってきてくれたボールだ。選手は大事に使うはずだ」

「将来、君達がグラウンドに来てくれた時、我々教員は異動でここにはもういないかもしれない。しかし、君達にとってはここが永遠に母校だ。後輩達に「俺達の頃は」なんて変な先輩風を吹かせるんじゃないぞ。そと後から練習を見て「頑張れよ」と励ましてやればよい。選手たちのためにボール拾いをやってやれ。その時の指導者に求められたらノックを打ってやれ。それでいい。そんな先輩になってくれ」

大学進学者が多いので、卒業後 4~5 年してからボールを持ってくる選手も多い。特に誰が来て、誰が来ないとチェックしたり催促したりはしないが、卒業生にとっては久しぶりに母校のグラウンド訪れ、近況報告できる良い機会になっているように感じた。素晴らしい習慣だと思ったので、私は異動した府中工業、片倉でも卒業生にボールを持ってきてほしいと話している。もっとも最近では、最初の給料はお世話になった父母へのプレゼントにし、野球部はその次で良いと言っている。

府中工業では高卒で就職するものが多かったので、4~5 月は友人同士連絡を取り合って、みんなでグラウンドに来てくれるのでボールがたくさん集まった。私が片倉に異動して数年後、府中工業の先生から「宮本さんが監督をしていた頃の選手が、先日学校にボールを 1 ダース持ってきてくれた」という連絡があった。その数日後、彼は片倉にもボールを持ってきてくれた。彼は高校卒業後、専門学校に進学したが辞めていろいろ苦労したらしい。しばらく東京を離れていたのが今まで来られなかったが、ずっと気になっていたとのこと。彼はいわゆるレギュラーではなかったが真面目に黙々と努力するタイプの選手であった。そんな彼が 10 年以上私の言葉を覚えていてボールを持ってきてくれたこと。指導者としてこんな嬉しい事はない。

片倉での数年前の卒業生である矢口は、現役時代にはやんちゃ小僧でよく私に怒鳴られた選手だった。彼は職人に憧れ、卒業後大工になった。5 月に彼は友人と一緒にボールを持ってきてくれた。そして、その次の月も別の友人と一緒にまた来た。「あれ、お前先月もきたよな」と言うと、「俺は先生やチームに人一倍迷惑をかけたので 1

回じゃ足りない。だからまた来た」と言うではないか。正直泣けてくる話だが彼のキャラクターからか私は「ありがとう」と素直になかなか言えない。思わず「お前はまだ足りない。あと数ダースは必要だな」なんて言ってしまった。「ボールなんて持って来なくていいから、また顔見せに来い」と言ってやればよかったと後悔した。勉強はできなかったがこんな素敵な卒業生がいるのが片倉野球部の自慢である。